

なのはな通信

第23号 2013.3



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 山田 かおる

笑顔と、涙と、

温かい励ましが共鳴し合う看護学校

校長 竹内 信治郎



「なのはな通信」は、学生のみなさんの一年間の活躍の様子、がんばりを笑顔や励ましの言葉で紹介し、お世話になったみなさんへの報告と感謝の気持ちを伝える楽しい通信です。

今年度は、2科最後の17期生と1科の1年生から3年生の4クラスの教育活動の展開になりました。教職員は「4クラスを全職員で担当する」という協力体制で臨みました。

体育祭や東葛祭も実行委員の学生を中心に全校の学生と職員が協力し、素晴らしい体育祭、東葛祭が行われました。体育祭では2科17期生が優勝したことが何ともうれしい結果となりました。閉会式での2科17期生のみなさんの喜び合う笑顔、涙に感動し、温かい祝福の拍手が会場に大きく鳴り響きました。

震災から2年目の今年度、学生たちは夏休みや春休みを利用して福島や千葉の被災地に出向き支援活動を行いました。そして「原発即時0」の社会に向けた地域の人たちの運動にも積極的に参加しました。また、原水禁世界大会には8名の学生と教職員2名が学校を代表して参加しました。こうした学生たちの積極的な取り組みに心から敬意を表したいと思います。

「学生が主人公」の学校を支えているのは教職員の力だけではありません。本校の講師陣の先生方の力もと

でも大きいものがあります。昨年の7月には、本校の看護学の理論的な支柱にもなっている日野秀逸先生の「健康とは何か、看護技術とは」の講演が行われました。感想を読ませていただき、学生たちの学びの深さにとても感心しました。そして日野先生からのお便りの中で、本校の「基本的人権擁護の立場に立つ看護教育」の実践を褒めていただいたことは教職員に大きな自信と励みになりました。

総合実習の卒論発表では、終末期の患者さんのおかれている現実、人間の命が粗末に扱われている医療制度や社会保障の実態に憤り、涙ながらに発表する姿に、学生の成長と命の平等、基本的人権擁護への熱い思いにとても感動しました。学生の可能性を信じ、教職員も学生と共に学び合い信頼を深め、笑顔と涙、温かい励ましが共鳴し合う東葛看護学校は私たちの誇りです。

早春の江戸川の土手では、菜の花の若芽がじっと春を待っています。2科17期生、1科16期生のみなさんに、うれしい春が訪れることを心から願っています。



学 校 行 事

写真で語る

2012

第18回 東葛看護専門学校体育祭

今年度の体育祭は優勝が2科2年生、特別賞が1科3年生と先輩方の深めた絆による団結力に圧倒されました。特に今年度の体育祭は昨年度の体育祭よりも応援の仕方がクラスごとに輝いていました。1科1年生は若さあふれる声で応援を、1科3年生は昨年度に続き仮装をして盛り上げてくれました。

今年度は昨年から継続された男子バレー、男女混合バレー、借り人競争、ドッジボールの他に新競技



として玉入れを行いました。例年通り男子バレー、男女混合バレーは白熱した闘いが繰り広げられると共に大きな歓声が鳴り響いていました。どの学年も体育の時間や放課後の空き時間を利用してバレーを練習する姿も見られていて、ハイレベルな戦いが繰り広げられていました。また、沢山の先生も参加されて、学生に引けをとらないプレーも見られていました。借り人競争では今年度から他学年との交流を深める為に、借りる人を自分たちのクラス以外に限定したことでスポーツを通し学年を超えたコミュニケーションがあり、答え合わせの際には笑い声がたくさん聞こえていましたね。

来年度は3クラスで初めての体育祭となりますが、3学年全員が協力して例年と変わらずに盛り上げられるよう、体育祭実行委員会を進めていきたいです。

体育祭実行委員長 伊藤 弾

第18回 東葛祭

東葛看護専門学校では9月の28日29日に東葛祭を開催しました。

今年の東葛祭のテーマは「未来に夢繋ぐ東葛看護～手を取り合って1つになろう～」でした。患者さんを支え地域を支える看護師となろう、未来に夢を繋いでいけるような社会・医療・看護が作り上げられていくことに希望をこめて学生同士でテーマを決定しました。

日頃お世話になっている地域の方々にも学びの状況を知っていただきたいと考え両日一般公開で東葛祭を行い、一日目は全クラスで学びの交流を行いました。それぞれの学年での実習や総合学習から得た学びを、発表を通して全クラスの学びへと共有していくことができました。1年生の基礎実習での学びの発表は3日間という短い実習の中で患者さんの事実をありのままに捉えたもので、他のクラスは初心に帰る思いで学ぶことが出来ました。2年生や3年生は、実際に患者さんに行った劇を通して分かりやすく学びを伝え、患者さんに工夫して知識を伝えることの大切さも学ぶことができました。

講師として総合失調症当事者である小熊俊雄氏をお招きし「障がいとともに「働くこと・生きること」～未来に夢繋ぐ社会をつくるには～」をテーマに講演を行っていただきました。障がいの辛さや、夢を叶えること社会で生きるには理解と支え合いが必要であるということ、当事者である小熊氏の言葉の数々で深く私たちに伝えてくださいました。

二日目には地域の方々への一般公開も行い、出店や縁日など、学年を超えて担当し、地域の方々に楽しんでいただく催し物を行っています。中でもフリーマーケットやマッサージを行うリラクゼーションは毎年人気であり今年もたくさんの来場者がいらしてくださいました。野田一民展では四肢麻痺を持ちながらも絵画制作を続ける野田さんの作品を展示し、毎年のテーマをもとに学生やクラス作品の展示も行いました。お菓子の販売を行ったレモンカンパニーさん、学生の実習でもお世話になった新松戸精神科デイケアさんも手作り雑貨の出店を行い、今年も賑やかで楽しい東葛祭となりました。

学生は実習などで忙しい日々を過ごしています。その中で東葛祭の準備を行うのもとても大変です。しかし、大変だからこそ今年のテーマのように手を取りあいクラスの壁をこえてみんなで協力し合い東葛祭を作り上げてきました。

みんなで手を取り合うことで、大変な時を乗り越えることも他のクラスとの交流を持つことも楽しい思い出もつくることもできるのだと学ぶこともできました。

第18回東葛祭実行委員長 武内 郁乃



「原発反対デモ “NO NUKES From 流山”」

にとりくむ看護学生たちの願い

4割の得票で8割の議席を獲得する小選挙区制。「責任をもって原発を再稼働させる」自民党大勝の衆院選挙でした。東葛看護学校平和ゼミナールの学生をはじめ、教職員、国民の願いは「原発即時ゼロ」です。

2012年7月、東葛看護学校元副校長、久保知代恵氏から「首相官邸前へ行きたくても行けない流山地域の人たちと、原発反対の取り組みを、平和行進に参加した東葛の学生たちと一緒にやれないだろうか・・・」と8月末に懇談が始まりました。

春・夏休みに被災地ボランティア、さようなら原発10万人集会、原水禁世界大会へ参加してきた学生たちは、「原爆と原発は同じ原理、安全に原発を動かすのは無理」、「震災直後、原発や放射線の恐ろしさを何も知らなかった、知らないままでいいのか」とおもいを語り、取り組みを決めました。



どんなデモにしたいか、服装や宣伝は？など準備を進め、ビラを見て差し入れてくれた風船や、クラスでつくった

横断幕をもって、9月・11月・12月に「原発反対デモ “NO NUKES From 流山”」を3回実施。地域の方を中心に東葛病院職員の参加もあり、総勢50～80人のデモとなりました。今後も1/月ペースで行う予定です。

平和ゼミナールの学生たちが、原発反対デモへ取り組む原動力のひとつに、日本国憲法を教育理念とした『平和と医療』を学ぶカリキュラムがあります。石巻・旭市ボランティアに参加した学生は、全校報告会で次のように発言しています。

「学校に入学して直ぐは、被災地や原発に興味はありませんでした。震災も漠然と大変なことになっているとしか感じていませんでした。この1年で被災地の現状や原発事故による放射線被害を学び、自分の足で被災地に行ってみたいと思い参加しました。

ワカメ漁の手伝いで、漁師さん全員が津波で家を



失い、漁港の仮設住宅で生活していた。穏やかな表情で話すその言葉に込められた怒りや悔しさははかり知れないモノで返す言葉が見つからずただ話を聞くことしかできませんでした。被災者が一番求めているモノは、被災した環境でも生きていくことができることの保障なのだと感じました。私たちにできることは、被災地の現状や被災者が伝えたいことをいろんな人に伝え、支援の輪を広げていくことだと思いました。初めて被災地に行ったことで、自分の震災に対する理解の無さを実感することができました。被災地の復興がなかなか進まないのは、私のように震災を他人事のように感じている人がまだまだたくさんいるということの表れなのだと思います。あすの生活にさえ不安を感じている被災者がたくさんいます。この日本という国に住む仲間であり、たくさんの仲間が苦しんでいる現状が今現在も続いているのです。そんな現状から目をそらしているうちは、どんなに時間をかけても復興が終わることはないと思います。自分たちに出来ることを行動に移すことで初めて、終わりの見えない復興が終結に向かうことができるのではないかと私は思います。」

差別的な受験学力競争によって、ほんものの知や科学への要求と出会うことを保障されない現代の青年たち。本校で“事実”に出会い、“表現”することで、自分の存在の意味や、未来への目的を、自分の未来と重ねて世界観を形成する時期にあります。学生たちから、あらためて表現の自由を行使するために、教育を受ける権利があると実感し、命と平和を脅かす全てにNoと“表現”し、原発即時ゼロを求め活動する決意を新たにしています。

東葛看護専門学校教員 生田知歩

学生と1科1年生 共に歩んだ一年

1科18期生

一同

担任

菊池 静華、佐々木 幸子

<交流研修>

入学して間もなくの交流研修は、放射線の影響で学内での研修になりました。レクリエーションをして食事を作りみんなで食べました。初めてのGWで全員が「看護師になりたい思い」を話しあいました。交流を深め、3年間共に看護師を目指し頑張っていく上での礎となりました。



<車椅子ウォッチング>

グループに分かれて車椅子で市内にウォッチングに行きました。バスや電車に乗った時には、周りの人の視線を感じ、「申し訳ない」と思うこともありました。また、車椅子に乗ってみることで、普段私たちが歩いている道がどれだけ生活しにくいのかを実感しました。

さらに、車椅子を利用している方のお話を聞くことができ、車椅子利用者だけでなく健常者であっても、バリアフリーの大切さを発信していくべきだと強く思いました。

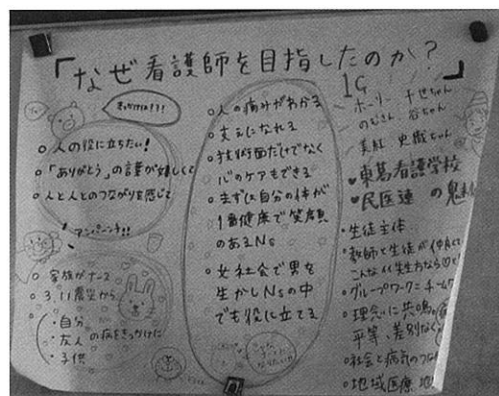
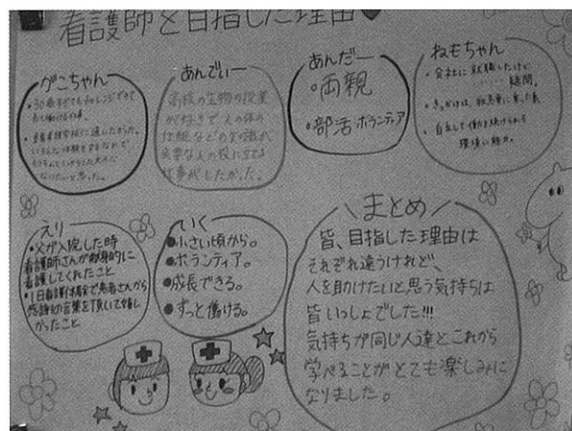


<体育祭>

当日に向け夜遅くまで練習し、本番はクラスが丸となって体育祭に参加しました。その結果、男女混合バレーボールでは優勝、総合2位という成績を収めることが出来ました。この行事を通して、クラスの団結力が更に強まりました。

<基礎1-1実習>

今回の基礎1-1実習には、「患者さんとは何か」を考えるということを目標に臨みました。実習を通して患者さんに関わる中で、「患者さんは願いを持っている自分と同じ存在だ」ということに気付くことが出来ました。また、自分の意見を伝えることや他人の意見を聞くこと、ペアで協力し共有し合うことで、それぞれ違った視点があることや話し合いの大切さを感じました。知識不足や生活背景・性格など患者さん自身のことがわかっていないと、患者さんの本当の思いが分からないということも学びました。





<東葛祭>

クラスを越えた縦割りだった為、普段交流することのなかった先輩と交流することができ、楽しく東葛祭に参加できました。学びの発表の内容を決める為の話し合いは、年齢差もあり、それぞれ価値観が違ったためまとまらず苦戦しました。しかし、クラスみんなで協力し自分たちで1から何かを作るという達成感を得ることが出来ました。



<基礎1－2実習>

7つの病院に分かれ、中には寮生活をするグループもあり、不安と共に始まりました。基礎1－2実習でも前回と同様、「患者さんとは何か」を考え、実習に臨みました。患者さんは病気を治すことが目的で入院していますが、願いを持って闘病生活を送っているということを知りました。しかし、その願いを言葉に表せるとは限らず、思いを伝えられる患者さんいれば、中々言えない患者さんもいました。前回よりも長い間患者さんと関わることで、その人の生活背景や送ってきた人生を聞き、本当の思いを掴むことが出来ました。5日間の実習を通し、患者さんとは、私たちが真摯に向き合ってこれからも関わっていく存在だと思いました。

<ナースングセレモニー>

11月にはナースングセレモニーがありました。一番感動したのは、全国からたくさんの祝電、応援のメッセージが届いたことです。私たちは自分が看護師になりたいとこの学校に入学しましたが、こんなに期待して待っていてくれる方たちがたくさんいるということを知り、その期待に応えなければならぬ、そういう責任がある存在なのだということを自覚することができました。先生からナースキャップをかぶせてもらい、感動したとともに、責任の大きさを自覚したセレモニーとなりました。



18期生は現役生と社会人が半々で、意見もいろいろ分かれるクラスですが、みんなで3年間頑張っていきたいと思います。

学生と1科2年生 共に歩んだ一年

1科17期生

一同

担任

福井 慶子、高田 澄子

2年次は、本校の特徴あるカリキュラムの1つである【生命活動】からスタートし、生命誕生・脳神経・呼吸器・循環器・消化器・内分泌・骨筋・免疫の分野でわかれて調べました。グループ内で理解できない部分をわかるまで話し合い、足並みを揃えてから自分達が知りたいことを追及していきました。自分達が調べ学んだことをクラスでしっかり共有したいと考え、どうしたらわかりやすいか、みんなに記憶に残るかをグループで話し合いながらゼミに向け準備をしていきました。

生命誕生では人間がどう誕生したのか、どう発達していったのかを詳しくパワーポイントを使って発表しました。

脳神経では医学的に治らないとされていても、働きかけて刺激を与え続けることで、機能が回復することがある事を知り、諦めずに関わっていくことが大切なのだと学びました。

呼吸器では、生物が呼吸して生きているという事についてグループで話し合い、呼吸器の発生の仕方や機能を一から学ぶ事が出来ました。また、グループで学んだことを皆に伝える為に劇通じて、楽しくわかりやすく学びを共有することができました。

循環器では、心臓は一番初めに発生し身体全体に栄養と酸素を送り、生涯一度も停まることなく動き続ける仕組みについて学びました。

消化器では初めに消化管の管は口から肛門まで1本の管ということ、発生について学んでいきました。消化器のそれぞれの臓器の働きや解糖系からクエン酸回路といった代謝を皆で勉強し理解することができました。またグループメンバーでの疑問として消化器は起床して就寝するまでどういうふうに働いているのかなど色々な疑問点を劇に取り入れながら発表しました。

内分泌ではどんな時にホルモンが分泌されるかを面白いシナリオを作り、問題形式にしてみんなに答えてもらい、苦手だった内分泌のしくみや身体全体が協調し合って生命活動を支えていることが理解できました。

骨筋では、骨は身体を支えるだけでなく、赤血球・白血球を含む血液が作られること、カルシウム代謝の仕組みについて学ぶことが出来ました。また、筋肉には臓器のはたらきにより筋肉の種類が違ったり、筋肉にあるアクチンやミオシン、カルシウムイオンが相対的に働き、筋肉を弛緩・収縮させたりすることも学んでいきました。

免疫では、T細胞による細胞性免疫とB細胞による液性免疫がありウイルスの時と細菌の時では、防御の仕方が違っていました。免疫の仕組みは難しく、劇にすることでより分かりやすく学ぶ事が出来ました。

各系でそれぞれ別々に作用しているように思われたが、実は8つの系は人間が生きていく上でお互いに調節し合って繋がっていることを学びました。

5月には生命活動の一環で田植えをしました。看護学校に来てなぜ田植えをするのかと疑問を抱く学生も多くいました。講義等で人間と稲のDNAは99%共通で同じ生き物であることがわかり、生き物を食べる事によって私たちは生きているのだと稲を身近に感じる事が出来ました。実際に田植えを体験して、とても辛かったが、これほど自然と触れ合う機会がありませんでした。10月の稲刈りでは、初めての人が多く戸惑いました。また日差しが強く、作業は重労働でした。しかし集中して楽しみながら取り組むことが出来ました。収穫祭では感謝の気持ちを込めて炊き込みご飯・豚汁・シーザーサラダ・白玉アイスを各班に分かれて作りました。

自分達の収穫したお米は食べる事は出来ませんでしたが、食べる事によって自分たちが生きられるということを改めて実感しました。

また、自分たちは田植えと稲刈りしませんでしたでしたが、実際のお米を作る過程は手入れなどを長期に及ぶた



め生き物が成長することは大変な苦労があったのだ。ホタル野の方々から聞き、自分たちが作った黒米をいただいたとき、さらに感謝とよろこびを感じました。

そして、9月から12月の4クールに及ぶ【各論】で実際に患者さんを観察していく中で人間の生きようとする力や自然治癒力を高めることに繋げていくことが出来ました。更に、疾患は生活そのものと大きく関係していました。特に労働は生きていくために必要不可欠ですが、その労働によって健康が損なわれてしまわないよう、早期発見するためにも健診が大切であることがわかりました。

母性では、妊娠期・産褥期・外来でのフォローなど3つの場所は繋がっています。命の誕生を間近で見ることが出来、小さな体で必至に生きる姿を見ることが出来ました。母性だからといって男子女子というのは関係なく、一人の医療者として実習に臨むことが大切だということに気付かされました。産後のお母さんが相当な疲労があり、一人では不安も大きいので話をしっかり聞きサポートする環境を整えていくことが重要だということがわかりました。

外科では、その人の不安を軽減し、安心して手術を受けられる環境を作ることや、手術後の回復力にはとても驚かされました。患者さんの治りたい・早く退院したいという気持ちを尊重し、援助していくことが大切で、その後のフォローをしっかりし、地域に安心して帰れるよう関わっていくことが求められていることを学びました。

精神では、自分たちが知らないうちに精神疾患の患者さんに偏見を持っていたことに気づかされました。しかし実習を通して患者さんに関わると、私達と何も変わらない一人の人だとわかり、先入観を持たずに一人の人間として接していかなければ行けないと感じました。また長期に渡って入院すること、そのものが外界との接点を減らしてしまい、セルフケア能力の低下に繋がるということがわかりました。そのため病棟では自分でやれることは自分でやってもらえるような声掛けをすることの大切さを学びました。退院後には再び社会復帰が出来るように就労支援センターなどの施設がある事を知りました。しかし社会全体で支援出来る体制がまだ日本では十分ではないと感じ、障がいがあってもその人らしく生活できるような社会を作っていく必要があると考えました。

小児では保育園では遊んでいるだけかと思っていたが、その1つ1つが社会のルールを学ぶものなのだと知れました。入院は子どもにとって安心できる環境ではなく不安が強いが安心できる環境を作り、その子に合った治療を考え早く家に帰れるようにすることや、成長発達を妨げないような関わりを取り入れることが重要だと感じました。

グループで4クール実習することで様々な問題が生じたこともありましたが、遅くまで話し合い、お互いの意見を交換し合い、個人がどんなことを考えていたのか、また考えを発信しないとメンバーに伝わらず、グループでまとまりある行動が取れないことわかりました。自分自身を振り返るよい機会にもなりました。

各領域で、人間が生活していく中で多くの制度がある事が分かりました。ゼミナールでは患者さんたちが利用しているサービスや制度について調べましたが、自分たちはまだまだ知らないことが多く、地域に帰る患者さんをサポートすることが出来ない事に気付きました。これからは、正しい制度を理解し、患者さんに情報を提供することで退院後安心して生活できるように勉強に励みたいです。



【地域フィールド】

では、各論で学んだことを生かし労働者の実態を捉え、生活と労働の視点で病気を抱えながら

地域で暮らすとはどのようなことなのか、今後の医療者として出来る事を何か考えて行きたいです。そして今目指している看護師という職業を取り巻く現状も見て考えていきたいと思っています。



学生^と1科3年生 共に歩んだ一年

1科16期生

一同

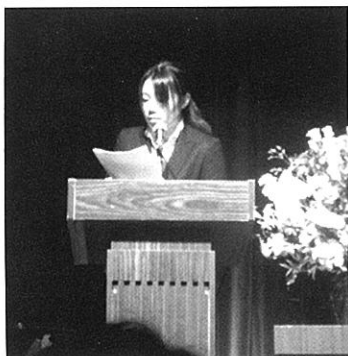
担任

青山 陽子、江島 典子

千葉県看護学生研究発表会

平成24年11月15日に千葉県文化会館で行われた千葉県看護学生研究発表会に参加しました。クラスで代表事例を決め、実習の忙しい中学校に行き、教員と何度もやりとりを行いクラスの力を借りて形にしていきました。在宅実習で受け持たせていただいた3年間外出することができず、「桜がみたい」と願うA氏からの学びを発表しました。A氏の外出を実現するために、病態から外出時に起こりうるリスクの検討、ギャッチアップ訓練の実施と評価、家族の調整、各関係機関との連携が必要でした。2週間という短い実習期間の中で看護師の方の協力を得て、上記の内容をグループで協力し実施していき実習最終日に外出実現することができました。A氏の笑顔を見ることができ学生もすごく嬉しく感じました。当日の発表では、とても緊張しましたが在宅実習から社会保障ゼミの学びも含め、現在の社会保障制度では、A氏のような「願い」を叶えることが非常に困難な状況であることを学びました。しかし、実践の中で外出に向けての準備の段階からA氏の表情や心理的变化がみられました。そしてこのことから、私たちは事例のように利用者の要求に沿った看護展開の有用性を感じることができ、また社会保障の充実により在宅療養の質が高まっていくように感じました。

そして本人の願いがいかに困難な要望であっても、その願いに近づけるようにチームで取り組み叶える努力をすることが、患者・利用者の思いに沿った看護であるのだということをA氏から学ぶことが出来、この学びを他の学校の方とも共有することができ、活発な意見交換があり、東葛看護学生らしい発表をすることができました。また、他の学校の事例を学ぶ中で自分たちの看護観について改めて再確認するいい機会となりました。



総合実習

学生生活最後の実習である総合実習では、それぞれの課題に向き合い苦しみながらも一生懸命に取り組んできました。その中で、「患者さんを中心にする看護とは何か」を仲間と考える中で、各々が成長出来たのではないかと感じています。

その実習をレポートにまとめ発表した卒業論文発表。終末期の患者さんを受け持たせていただいた学生は、在宅で最期を迎える為には今の社会保障では難しいことや、だからこそ私達が声を上げていかなければいけないことなどを発表しました。また、透析導入期の患者さんを担当した学生は、「痛み」の訴えをどう捉えるべきか悩むなかで、改めて病態をつかむ事の大切さに気付き、発表につなげました。「痛い」について考えた他の学生は、痛みは様々な不安によって助長されること、だからこそ、その不安を少しでも軽減する事が具体的な痛みに対する看護なのだ学びました。加えて、特にその事例の患者さんは金銭的な不安が大きい方でした。その患者さんの社会的背景を考える中で、3年間を通して学んだ複雑な社会保障や社会制度が、その時やっと患者さんを通して看護に結びつくという実感を得られた、と締めくくりました。

多くの学生は卒業論文を作成するに当たり、憲法や社会保障について改めて学びました。これらは患者さんとは切っても切れない関係にあり、自分にも大きく影響しているのだと結んでいる学生も多かったです。今後看護師として働き始め、慣れない環境の中で忙しく過ごすだろう。しかし、私達は「患者さんに寄り添う看護師になろう」とナーシングセレモニーで誓いました。そして「患者さんに寄り添う」という言葉の重みと、それがどういうことを考え



ながら臨んだ総合実習で、社会に目を向け続けなければ看護はできないと実感しました。だからこそ、私達は看護師になっても社会に目を向け続け、変化する社会を捉える為に学び続けていきたいと思います。

研修旅行

私たち16期生は、鹿児島・知覧、熊本・水俣、長崎・佐世保の3県にまたがり、戦争・公害・基地問題の視点から平和と医療を学びました。事前学習では地域フィールドと関連づけながら、日本の憲法の変移、エネルギーの変移、安保問題、公害病、日本の歴史、ハンセン病、九州の文化をそれぞれのグループで学びました。水俣病検診に参加したグループもあり、社会の授業で習った遠い記憶の水俣病を、今なお続く身近な問題として捉えることができました。

事前学習での学びをふまえた旅行ではハードスケジュールの中、5人の講師の方から貴重なお話を聞くことができました。知覧では、赤崎盛彦さんに特攻隊の歴史や背景を教えていただき、事前学習での国を挙げた軍国教育のあり方について考える事が出来、教育が与える影響の大きさを知りました。水俣では自身も水俣病でありながら、水俣協立病院の総看護師長をされている山近峰子さんの案内の元、水俣市内をめぐりました。協立病院の藤野紘医師から水俣病検診についてお話をうかがい、山近総看護師長から自身の体験談をお話していただきました。チッソに支えられ発展してきた水俣がチッソによって公害が引き起こされ、チッソの従業員の多く住む街では水俣病を公言できずにいた人や、食べる物が魚しかなくその魚によって水俣病になった人、水俣病と認定されたことで起きた偏見や差別など、現場か

らしか学ぶことができない事実を知りました。長崎では1日目に被爆者である谷口稜嘩さ



んの講話を聞きました。背中が真っ赤にただれ、1年9ヶ月もの間身動きが取れ

ずうつ伏せのまま生活し、今なお原爆の後遺症と闘っています。人間は核との共存はできないということを実感し、2030年まで生きて原発がなくなる世の中が見たいと語る谷口さんの力強さを感じることができました。2日目に佐世保へ行き、長崎大学准教授の冨塚明さんから安保の問題から基地問題まで市内を回りながらお話をしていただきました。アメリカはもともと佐世保の軍需工場や佐世保基地などを駐軍基地にしようとしていたことや、まだ多くの敷地を有していますが、佐世保基地が少しずつ日本へ返還されたことを知りました。

3泊4日の九州旅行は、たくさんの学びがあり、おいしいものを食べ、きれいな海をみて、みんなわいわい楽しく過ごしました。バスでの長距離の移動は大変でしたが、寝たり、DVD鑑賞をして盛り上がりたりとマイペースに過ごし、有意義な旅行となりました。

事後学習は1科2科合同で発表し、お互いの学びを共有しました。別の所を旅行しましたが、根本となる社会問題は共通し、戦争のない世の中を私たちが創っていかなければならないと感じました。



学生と2科2年生 共に歩んだ一年

2科17期生

一同

担任

斉藤 みゆき、伊波 すみ子

各論小児

先天性ミオパチーで原因不明の呼吸不全から、生命維持のため生後6ヶ月で気管切開、夜間人工呼吸器管理をしている5歳3ヶ月の男児を受け持った。両側停留精巣オペ目的で入院し、全身麻酔にて腹腔鏡下精巣固定術が行われた。術後1日目は痛みが強く、痛みがあるのに歩く理由を自分で理解する応援、泣きながら歩いているK君への看護の役割は何か考え、目でみてK君の頑張りが分かるようにシールの表や電車ごっこの遊びを通して離床ができるような応援をしていった。今回の各論実習で受け持ちした患者それぞれから、子どもの発達・成長のすごさを教えてもらった。そして、正確な病態の理解で始めて患児への応援が可能になることを学ぶ事ができました。

田中

宮森630会の豊濱さんの講演では、アメリカ軍のジェット機が小学校に墜落し、大勢の子ども達が亡くなる大惨事であったことを知りました。豊濱さんが事故の話しを悔しそうに話す姿が忘れられません。沖縄協同病院の蟻塚医師より、戦後半世紀以上経過し、退職や近親者の死がきっかけで、戦争体験がよみがえり苦しい思いをされる戦後ストレス障害の方がいる現状を知りました。戦争後67年経ちますが、実際に沖縄に行き、自分の目で現地を見、生の声を聞くことで、今も戦争は終わっていない事実があると知りました。戦争を起こさず平和を守るために、日本には素晴らしい日本国憲法があります。憲法で平和を守り、国民主権のもとで基本的人権が尊重され、誰でも対等、平等に医療が受けることができるような社会にしていけることが重要だと学びました。

研修旅行

憲法と平和と医療を学ぶため、沖縄に研修旅行に行きました。平和祈念公園資料館では、日本の教科書には戦争についての記載が少なく、アジア諸国と内容が違うことを知りました。元鉄血勤皇隊の古堅先生の講演では、15～18歳の学生たちが恐怖や生きたいという気持ちを出さず、戦場での任務を遂行したなど生の声を聞き、尊い命が奪われた沖縄戦の事実を知りました。





体育祭

協力すること。団結することの素晴らしさを学びました。そして見事に優勝する事ができました



総合実習

総合実習でパーキンソン病の患者さんを受持ち、「家に帰りたい、食べたい」という願いがあることを知りました。この病気が難病指定から外されると聞き、パーキンソン病友の会に話を聴きに行きました。診断までの時間や費用がかかること、薬を内服していても、動きが制限され苦しんでいる方がたくさんいることを知りました。治療が確立していない病気を難病指定から外す動きがあり、社会保障制度の改善に行動を起こしていく役割があると学びました。



患者さんや私達を取り巻いている経済的格差や日本の社会保障の貧困の実状を知る為には、歴史を紐解いていかななくてはならないと気づきました。朝日訴訟や、全腎協などの先人の運動により、権利としての社会保障が勝ち取られたこと、スウェーデンやフランスでは、医療や学費が保障され、日本とあまりにも違う現実を知りました。

学校に入学するまでは、テレビや新聞の報道に疑問を持つこともなく、政治に関心さえありませんでした。卒業研究で学び、社会、医療、政治は繋がっているという事、政治は、政治家にまかせれば良いというものではなく、私達一人一人が主権者として生きて行く事が大切だとわかりました。

夏の公開講座

「医療技術とは」～人間の健康から考える～

東北大学名誉教授 日野秀逸 先生

本校では看護学概論で学ぶ「健康とは」において、日野先生の「保健活動の歩み」を副読本として使用し、『人間は自己の生活のために受動的に外界・環境に適応するのではなく、目的意識的に外界に働きかけつくりかえるのであり、この活動を生物一般の適応と区分する意味で変革と捉え、人間の健康とは、「自然の変革＝労働、社会の変革、発達＝自己の変革、人生の享受」である』と学んでいる。著者である日野先生を迎えて学ぶという念願の機会を得ることが出来、人間とは・健康とは・医療技術とはについて学ぶことができた。学生の学びのレポート紹介する。

「人間の労働は目的を持っており目的を達成するために、そのような手段を使い、どの達成するのかを考え行っている。人間の頭には常に設計図がある。そのため法則があり実践していると聞き、普段、さほど意識はしていないが、人間独自ののだと思うと不思議な感覚になった。例えば、医療であれば労働の手段として、自身の目、耳などを延長して器具を使い、どの時必要な労働手段のセットを使い、労働対象に働きかけている。医療技術は、人間が他の動物と違うことや生命活動でまなんだ進化の歴史を思い出した。そして、医療技術も人間性が問われるのだと思った。医療要求は24時間365日、どのようなときに要求があるかわからない。そして格差社会により貧困と病気が密接に関係している。医療は、支払能力に応じた原理は成り立たない。お金があるから良い治療を受けられるという仕組みが作られてしまったら、どれだけの人が苦しむだろう。TPP について行った授業を思い出した。生存権が、やっていい事を伸ばすアクセル、やっていけないことを止めるブレーキの役割があると聞き、人権意識について改めて学ぶことができた。求められる医療労働者は、技術者、科学者、組織者、民主主義者、同伴者であると知った。一つ一つどれも重要なことと感じた。」



卒業記念講演

「社会保障と税の一体改革でどうなる、

日本の医療・介護・社会保障」

～基本的人権の擁護の立場に立つ医療～

一橋大学名誉教授 渡辺治 先生

2013年2月27日、3日後に卒業を控えた1科16期生と2科17期生への卒業記念講演会を行いました。新自由主義・構造改革とは何か、なぜ社会保障の削減を目指すのか、そして人間の尊厳を満たす社会と医療を目指してどう私たちが向かったらいいのかを話していただいた。

「皆が最低限度の生活をするためには、やはり個人の問題ではなく、社会保障が必要であると思った」「一部の企業だけが潤い、私たちのような一般人の生活に目が向けられていないのが残念です。国民の税金を国民のために使ってほしいし、困っているひとに手を差し伸べるべきではないかと思います。」
「今後医療従事者となっていくが、一国民としてもこのままの政権では生きて行くのが不安でたまらない。運動が選挙にわずかであるが表れていると知り、いつか届くと信じて動くことが大事なんだということを改めて感じた。」

学生たちは、見えにくくされそして政治によってつくられている今の社会情勢について聞き、このままではダメと実感を持って学び、主権者として国民が大切にされる社会をつくっていきたいと決意した「卒業記念講演」になった。



教員研修 福島フィールドワークの学び

福井 慶子

1泊2日福島に研修で行きました。小名浜生協病院で看護部長さんからは震災時のことを話して頂きました。

震災当初はやはり職員は泊りがけで患者さんを守ったそうです。断水期間が1ヶ月と長期化して供給が大変だったこと、しかし支援物資は3月15日から入り、無駄になるものは何もなかったとのこと。また職員本人の意思ではなく、家族の意思で避難させられた人が多くいたが、結果的には退職者は1名だったそうです。しかし一度避難して戻った職員と、とどまっていた職員の間では歪みが生じてしまったそうです。このことは2日目の桑名協立病院の師長さんも話されていて、現地に行かなければわからないことだと感じました。

また福島で生活する保護者の方からは、甲状腺の検査で異常がみとめられる子どもが4割増えていること、住み続けることでずっと不安を抱えていること、しかし子どもだけを疎開させることは家族の分断となり、とてもつらくてできないという選択をしたこと、「福島で育てていること自体虐待だ」という人たちがいること、核害の街に生きる私達がどの選択をしても尊重してほしいことなどを話されました。このようなお話を聞き、原発は命、生活そのものを奪い、今もなお続いていることを実感しました。



バスでは広野町、楡葉町の方まで入りました。原発事故後いわき市では最高 $23.72\mu\text{Sv}$ まで達したようです。情報も混乱して市役所から避難するように指示されほとんどの人が逃げ、広野町は事故前が5400人だったのが、現在は505人しか戻ってきていないとのこと。楡葉町は警戒区域から避難指示解除準備区域となり出入りは出来るようになったが宿泊は禁止と話されました。線量測定ではいわき市は 0.2

$\sim 0.4\mu\text{Sv}$ だったのが、楡葉町に入るとどんどん上がり、屋外は $0.5\sim 0.8\mu\text{Sv}$ になり、見えない放射線の怖さを感じました。

被災地復興とはいっても産業の回復も

復もしておらず、農業にいたっては放射能の被害により、田んぼが荒地地となり、これからの見通しが立たない状況でした。

復興支援のお金が他の事業に使われている現実もみると、国は本当に福島の現状や生活している人の思い、現実を把握していないと感じました。

このような苦しみの元凶は原発です。私は引き続き原発はいらない、今後このような被害は二度と起こさないことを誓っていきたくと思いました。

学生自治会紹介

こんにちは。第15期学生自治会です。

昨年9月に役員選挙を行い、新たなメンバーで活動しています。学生が主人公となり、よりよい学びを深めていけるような学生生活を送れるよう目指しています。昨年はペットボトルのキャップを集め、ワクチンに替える活動をしてきました。

今後の活動内容として全校生徒を対象にアンケート実施や目安箱を設置し、学生の声を聞かせて頂き自治会活動に反映していきたいと思っています。その他に国試激励会や3年生を送る会、新入生歓迎会などを予定しています。学生自治会は、より良い学生生活を送れるよう常日頃頑張っていきたいと思っています。



第15期自治会役員

会 長	石塚 直人		
副 会 長	天野 美沙	関山 嵩	
書 記	加藤 森	吉田 有希	
会 計	木村 文香	根本 綾	
会計監査	小宮 恵		

ようこそ先輩

一昨年の12月に双子の男の子（現在1歳）を出産し、今年の1月4日から育児休業後、東葛病院6西病棟に復帰しました。

仕事のことは頭の片隅にありつつも、子育てに没頭していたので、本当に復帰できるのか相当悩みました。でもそんな中、背中を押してくれたのは看護学校で出会った仲間でした。

この学校で苦楽を共にした1科7期生の仲間は私の一生の宝物です。今は1年半近く離れた仕事の勘を取り戻す事と毎日の育児に必死ですが、職場の人達や家族の助けを借りながら、また1から新たな気持ちで患者さんと向き合い、頑張っていきたいと思います。

1科7期生 平山伸子



「患者としてだけではなく人として相手を理解する。そして患者の立場に寄りそう」わが校の看護教育のもと2科7期生として学び、卒後もうすぐ10年になります。

最初のフィールド実習で在宅療養中の患者さん（ALS・全介助）を訪ねた際に、「入院は避けたい」と。理由は、看護師を呼びたくてもコールを押すことができずラウンドまで辛い思いをした経験を知った時、基礎実習でがんの患者さんの告知に立ち会った時等、患者さんの生の声で自分の事のように涙したことを思い出します。もともと涙もろくその後もありとあらゆる場面で涙することが多かった私ですが、密着した患者さんとの様々な場面で自分自身を振り返り、看護の原点に立ち返ることを教わりました。私の原点はそんな学生時代です。現在は勤医会・新松戸診療所で師長として勤務しておりますが、奮闘中の毎日です。

今回2科閉校とのことで非常に淋しくしく残念ではありますが、2科育成に携わって来られました方々に感謝申し上げるとともに今後の民医連看護師育成に期待致します。

2科7期生 野口輝美



編集後記

校舎の窓から臨む、江戸川の土手に咲く菜の花が大きく膨らみ始めました。

3月2日に1科16期生と2科17期生両科での最後の卒業式を無事に終え、希望を胸に78名が巣立っていきました。

そして3月9日には18年間の教育活動に幕を閉じる「看護第2科」の閉科式典を、全国から300名余の来賓者・卒業生・元教職員のご参加のなか開催しました。語りつくせない開校当時の貴重なお話し、本校の教育は民主主義が貫かれていると語っていただいた講師の話、そして希望を託して多くの学生さんを送り出していただいた民医連の看護部長さんの話、教職員は大変勇気づけられました。2科の閉科は残念ですが、寄せられた多くの熱い思いを大切に、「あしたへ向かって」歩み続けたいと思います。

これからも、東葛看護学校が卒業生にとっても、在校生にとっても、そして未来の看護師を目指す皆さんにとっても「希望の学校」であるために、学生とともに学び発展していきたいと決意を新たにしています。

編集委員会 山田かおる 江藤ひろ 伊波すみ子